

Global Community Centre (GCC) における活動のひろがりとその教育的効果

佐野 愛子・三ツ木 真実・セーラ リッチモンド

抄録：本学国際言語学科のカリキュラムを改変すべきであるという喫緊の課題に応えるべく、2016年4月より新カリキュラムが導入された。このカリキュラム改編と並行して学生の留学を促進するための取り組みと、学生が日常的に外国語によるコミュニケーションを経験できるための場の創設が進められた。特に二点目の取り組みに関連し、本稿では日本語禁止の部屋，“Global Community Centre”開設の効果について報告する。今年度は学生自らの発案によるプロジェクトが数多く展開された。それらのプロジェクトにおいては、学生が英語を活用する機会が生み出されたことに加え、地域社会や同じ学科に学ぶ他の学生のために自らができることは何か、という視点を持てたこと、また、プロジェクト遂行のために適切な支援を学内外に求める経験を積んだことなど、大きな学びが学生にもたらされた。

キーワード：コミュニケーション、英語運用能力、プロジェクト

1. Global Community Centre (GCC) 設置の背景

1.1 国際言語学科における新カリキュラムの策定とその目的

1.1.1 「英語を学ぶ」から「英語で学ぶ」への転換

佐野（2016）にまとめられているように、本学国際言語学科の新カリキュラムを作成するうえで重視した二つの柱がある。一つ目は「『英語を学ぶ』から『英語で学ぶ』への転換」である。これを実現するために、講義内容を刷新し、「多読」や「アカデミック・ライティング」、および「スピーキング」などの英語運用技術の訓練にかかわる講義とともに、「北海道の観光」や「世界遺産」など、「観光のコンテンツを英語で学ぶ」コンセプトの科目を必修として多く配置しながら実践的な英語運用能力を高めるための講義を展開することとなった。

1.1.2 学生の主体的な学びの支援

新カリキュラムの二つ目の柱は、「学生の主体的な学びの支援」である。前述の「観光のコンテンツを英語で学ぶ」科目群は、実践的な英語の運用能力を高めるために配置された科目であると同時に、このコンセプトを具現化するためにも配置されている。これらの科目においては、教員が既存の知識を学生に伝えるという、知識伝授型の学びではなく、学生が課題を自ら設定し、その解決に向けて探求を深めていくために教員が支援する形の学びが展開されているからである。こうした科目における実践の一例については、本論集の三ツ木・佐野・澤田論文に紹介されているので参照されたい。

1.2 国際言語学科における新カリキュラムを補完するためのとりくみ

こうしたカリキュラム上の変革を補完するため、カリキュラム外の取り組みとして計画されたものが2点ある。一つは学生の留学促進の取り組みであり、もうひとつが本稿の主題である Global Community Centre (GCC) の活用である。

1.2.1 留学促進の取り組み

「実践的な英語運用能力を育成する」という新カリキュラムの方針に基づき、学生の留学をこれまで以上に推進することがあり方検討委員会によって決定された。まずは短期留学の促進についての取り組みから始めることとなり、長期休暇中の1か月程度の短期語学研修について、学生の留学を経済的に支援するための奨励金制度を創出した。このプログラムのパイロットケースとなる2015年度は、200万円の奨励金を準備して、夏季休業中の短期語学研修プログラムを実施した。その結果NZに6名、オーストラリアに2名、カナダとフィリピンにそれぞれ1名が短期留学したことは佐野（2016）にも示されたとおりである。これらの学生は一律に英語学習へのモチベーションを高め、積極的にTOEICなどの検定試験に挑戦したり、その留学体験を英語のプレゼンテーションにまとめてオープンキャンパスなどで報告したりするなど、語学習得の面からもまた積極性・自主性の面からも大きく成長した。彼らの1か月の短期語学研修の成果は、この9名のうち3名が次年度にあたる2016年度にNZおよびカナダにおける6か月から1年間の長期留学に旅立っていったことにも見て取ることができよう。

こうした成果を踏まえ、2016年度には800万円を用意し、4月に行われるTOEICの成績順に上から15名に30万円、それにつづく35名に10万円の奨励金を活用してもらえるよう制度を拡充した。この制度を利用して今年度は23名が短期語学研修に参加している。ただ、30万円の奨励金があってもなお経済的負担のために語学研修参加を断念するものが多く、10万円の奨励金のほうは活用実績が極めて少なかった（2名）。来年度は配分の方法をさらに検討する必要があるだろう。

1.2.2 Global Community Centre (GCC) の設置

国際言語学科の新カリキュラムを教育課程外から支えるもう一つの大きな取り組みがGlobal Community Centre (GCC) の活用である。これは新カリキュラム策定の作業終了に先行する形で2014年10月に2号館2階のラウンジに設置されたものである。このラウンジ内では日本語の使用は禁止されていて、学生及び教員は英語または中国語のみを使用することとなっている。飲食も可能であるため、学生が自由な雰囲気です日常的に外国語におけるコミュニケーションを体験できるよう配慮されている。



図1 GCC内の設備

GCCには、インターネット回線のあるPC2台、DVDプレイヤー、教材提示器、プロジェクターおよびスクリーンが設置され、各種検定試験用の教材、映画のDVD資料、および多読用の本などが配置されているため、講義で課されたプレゼンテーションの練習、検定試験に向けた自主学習、オープンキャンパスの練習やゼミなど、様々な用途に使用できる場となっている。2016年度には、このGCCでの活動が一気に開花し、多様な活動が展開され始めた。以下、これらの活動についてその実践を報告する。

2. Global Community Centre (GCC) における2016年度の活動

2.1 English Speaking Society (ESS) による英会話による交流活動

2016年度よりは、正式にESSの活動をGCC内で行うことになった。英語担当の教員の参加も日



図2 ESS活動時のGCCの様子

常的に行われるようになり、毎週水曜日の昼休みを利用して英語による会話を楽しむ会が行われるようになった。参加対象者を限定せず、来たい時に来られる人が参加するというスタイルをとっている気軽さが功を奏したのか、1年生の参加も多くみられるようになった。話題は時事問題や季節の話題など、その場にきた学生の中で自然に決まっていく。多くの場合は上級生と教員の会話の中に下級生が少しずつ入っていくスタイルである。GCCによく来る上級生は英語教員志望のものも多いため、会話に入りにくさを

感じてまごついている下級生に対しそれとなく簡単な質問をしたり、難しそうな語彙を説明したりするなどの支援も多くみられる。下級生にとっては英語でコミュニケーションをとるための練習になり、上級生にとっては自分よりも運用能力が劣る第二言語話者とのコミュニケーションの良い練習となる。こうした活動は留学前の学生の準備としても、また留学後の語学力の保持のためにも大いに活用されるべきであると考えられる。

活動の形態としては、最初のうちは来室者皆が一つの輪になって話そうとしていたが、来室者が増えるにしたがってその方式では一人当たりの発話頻度が低くなりすぎるようになったため、自然と小さなグループに分かれて会話を楽しむスタイルに変化していった(図2)。今年度のこうした集まりには、他学科の教員や学生の参加も見られ、次第にその交流の輪が広まりつつある。

2.2 Writing Clinic

新カリキュラムでは多くの科目において、英語でのレポート課題が出される。これはライティング関連の科目に限ったことではなく、例えば「スピーキング」においても、3週間に一度の頻度で、スカイプのレッスンでネイティブ・スピーカーにインタビューしたことについてクラスでディスカッションしたのちにそこで学んだことをレポートにまとめる課題が課される。「多読」の講義においても、読んできた本に関するクラスディスカッションを経てレポートにまとめるという課題が数多く課される。こうしたレポートの書き方に関しては、「アカデミック・ライティング入門」の科目において学習するが、そこにおいてもほぼ毎週何らかのライティング課題が課されるため、学生たちは入学後、高校時代とは比べ物にならない分量のライティング課題に取り組むことになる。

「アカデミック・ライティング入門」の講義でさまざまなライティング・ストラテジーを学ぶ機会があるとはいえ、そもそも文章を書くことに慣れていない学生や、英語の文章を書く機会がこれまでほとんどなかった学生にとって、これはかなり厳しい試練となる。こうした学生を支援するため、木曜の昼休みに、本稿の執筆者三名が協力してGCC内でWriting Clinicという個別指導を始めた。

第二言語学習者を多く抱える英語圏の大学では、こうしたライティング力アップのための支援がほぼ例外なく準備されている。第一著者の卒業したトロント大学でも大学全体のライティング支援として、単位認定なしのライティングコースや単発のライティングワークショップが頻繁に開催されるほか、予約制の個別のコンサルテーション、個別のインテンシブコースが用意され、また必要に応じてアクセスできるオンライン上の資料も多数準備されていた。また、学部ごとにはその分野の大学院生を雇用する形でのライティングセンターも設置され、その分野の専門知識をもつ担当者による論文指導を受けることができた。



図3 Writing Clinic で指導する上級生とアドバイスを受ける1年生

こうした経験からも、もっとも有効な支援策は個別コンサルテーションだと考えられる。そこで、特にライティング課題に困難を感じている1年生を対象にこうした個別コンサルテーションの場を設けることにした。しかし、こうした学生の参加が増加するにつれ、講義担当教員のみでは手が回らなくなった。かといって大人数をまとめて指導するのであれば講義とあまり変わらず、個別コンサルテーションの意義が損なわれてしまう。

そんな中、手伝いを申し出てくれたのが英語教育のゼミに所属する上級生だった。彼は来年4月から高校で教壇に

立ち、ライティング指導を行うことも念頭に、1年生のライティングの支援活動プロジェクトを始めたのである。このプロジェクトには、「アカデミック・ライティング入門」を履修する者の中から、ライティング課題について継続的な支援を希望する参加者を募り、結果として4名が手を挙げた。彼らに出された課題を理解するために、指導役の上級生は月曜日に行われる彼らの講義に欠かさず出席する。1年生は木曜日までに自力で課されたライティング課題を書き上げ、木曜の昼休みにこの上級生から様々なアドバイスを受けてさらにレポートを書き直していく。このアドバイスに際しては「アカデミック・ライティング入門」の担当教員たちもそばにいて、適宜補助的な指導や、この上級生の指導に対する指導を行う(図3)。Writing Clinic と名付けられたこのプロジェクトの成果は、現在指導役の学生が卒業研究としてまとめているが、参加した1年生はいずれも非常に肯定的にこのプロジェクトの意義を認め、また彼らのライティング力は著しく向上したことが認められている。同時に、指導役の学生にとっても、ライティング指導力を向上させるための良い機会となり、また、「アカデミック・ライティング入門」担当者間のライティング指導に関する貴重なディスカッションの場ともなったことから、この活動の意義は非常に大きかったと考える。

2.3 Tandem Learning

Writing Clinic の成功に触発されるようにして始まったのが、1名の中国人留学生による Tandem Learning の取り組みである。彼女は、中国人留学生と中国語を学ぶ日本人が多く在籍する本学科において日本人学生と中国人学生との交流があまり盛んではないことを残念に思い、なんとかこうした



図4 Tandem Learning で留学生に中国語で質問する日本人学生

交流を活発化させたいと感じていた。そんな中、英語教育のゼミにおいて英語を学ぶ日本人母語話者と日本語を学ぶ英語母語和者がお互いの言語修得を支援しあう Tandem Learning という活動が紹介されたことをきっかけに、同様の試みが本学でも可能なのではないかと考えた。彼女は中国に留学した経験のある日本人学生の友人と協力し合い、中国語を学ぶ日本人学生と日本語を学んでいる中国人留学生が一つのテーマで語り合う場を設定したのである。

当日の会には、GCC いっぱいに日本人学生と中国人学生が集まり、大きな成功を収めた(図4)。中国の食文化

をテーマとしたプレゼンテーションは、日本人学生も中国人学生も中国語で行い、中国語を理解しな

いオーディエンスのためには逐次英語による解説を加えた（ここでも日本語禁止の GCC ルールは徹底された）。会場からは活発な質疑応答もあり、中国人留学生と日本人学生が中国語と英語を介してコミュニケーションをとる場面が創出されたことは大きな成果であるといつてよいだろう。参加者からはこうした会の継続を求める声が多く寄せられたこともこのプロジェクトの成功を示しているといえよう。



図5 Global Caféでの留学報告発表



図6 Global Caféでの留学相談会

2.4 GLOBAL Café

もうひとつ今年度新たに始められた取り組みが、GLOBAL Caféである。これは、昨年度も不定期に行われていた、留学報告会を拡大したもので、留学経験者による留学体験のプレゼンテーション及び留学に関するQ & Aの機会（図5）に加えて、本学科の短期語学研修を担当する留学ジャーナルの担当者が留学相談会（図6）を行うというものである。

留学を経験するものが増加するにつれ、「自分もぜひ留学してみたい」と思う学生も増加してきたことは非常に喜ばしいことであるが、数の増加につれ、個別の相談に教員が対応しきれない場面も増えてきた。これを解消するためには留学経験者による質疑応答の場を増やすことと留学の専門的な知識をもつコンサルタントに質問する機会を増やすことが必要となり、国際課と連携してこうした機会を準備した。留学ジャーナルの担当者が毎月1回東京より来

札するのに合わせ、千歳空港からの道すがら本学に立ち寄ってコンサルティングをしてくれることとなった。学生たちは「とりあえず留学してみたいのですがどこの国がおすすめですか？」というような大まかな質問から「カナダに1年間留学する際にどのように送金するのが一番簡単で安全ですか？」というような具体的な質問に至るまで、専門家の意見や実際に留学を経験した先輩たちのアドバイスを受けることができるようになった。参加者は国際言語学科にとどまらず、他学科の学生も参加してくれるようになってこの活動は一層活発化してきた。学内全体へ留学促進を働き替える有効な場として、今後も月一度のペースで定期開催したい。

2.5 恵庭市の小中学生に対する英語支援プロジェクト：Noblesse Oblige

今年度はGCCで活躍する学生たちの中から自主的に発案されるプロジェクトも始まった。恵庭市の小中学生に対する英語支援プロジェクトもそのひとつである。これは英語教育ゼミに自主的に参加していた3年生の学生が始めたものである。小学校における英語教育の導入に伴って、学校外で英語学習をできる経済力・教育力のある家庭の子どもとそうでない子どもの間の教育格差が拡大していることについてゼミにおいて話し合われたのをきっかけに、国際言語学科に学ぶ自分たちにできることはないだろうかと考えてNoblesse Obligeと名付けたこのプロジェクトを始動した。Noblesse Obligeとは元来貴族などの高貴な立場にあるものの社会的・経済的弱者に対する奉仕の義務、という意味合いでヨーロッパで用いられてきた言葉である。現代的な解釈の中には、教育を受ける機会をもち得たものが、教育を受ける機会に乏しいものに対しできる限りの貢献をする、というものがあ

プロジェクトの責任者の学生はそうした意味をこのプロジェクト名に込めた。

発案当初、このプロジェクトは、塾や英会話教室に通うことができない子どもたちを対象に、GCCで英語活動を行い、英語に親しんでもらって劣等感を感じることなく小学校の外国語活動を楽しんでもらいたい、というものを想定していた。この学生の熱意に共感し、第一著者が恵庭市役所の企画課および社会教育課などに相談した結果、もっとも利用者にとっても支援者にとっても負担の少ない方法として浮上したのが大学から徒歩3分のところにある黄金ふれあいセンターにおける英語の本の読み聞かせ活動を行う、という案だった。



図7 恵庭市小中学生向けのクリスマス会における英語の絵本読み聞かせ活動

責任者の学生はこの活動を持続的なものとするために1・2年生の中にも賛同者を募り、チームを編成した。そのうえで、英語の本の読み聞かせをまずは実施してみることとして、12月17日にセンターで行われた小中学生向けのクリスマス会の中でアクティビティのひとつとして実施することになった。

実施してみると想定以上に年少の子どもたち（中には乳児も）の参加が多く、読み聞かせ自体をあまり経験したことのない学生にとっては難しい経験となったが、学生たちが自分たちができることを考えるための貴重なきっかけとなったと考えている。実際の活動の場がGCCになるかどうかは今後の検討次第ではあるが、GCCでの交流を通じて育まれたアイデアがGCCという物理的な場所を飛び出して地域に向けて広がっていくという意味においては、このプロジェクトもGCCにおける活動の産物であるといえるだろう。来年度に向けては、どのような形での支援がもっとも学生の能力と地域のニーズにマッチするか一層吟味していく必要があると思うが、学生の主体的な発想を大切にしながら適切にアドバイスをしていきたいと思う。

2.6 カンボジア留学から生まれた「ひとしづくプロジェクト」

プロジェクト Noblesse Oblige 同様に今年度学生主体ではじめられたプロジェクトに「ひとしづくプロジェクト」がある。これは夏季休業を利用して行われたカンボジアでの語学研修に参加した学生の発案によるものである。

この研修は、英語の語学研修とともに、世界遺産アンコールワットのゲートシティであるシェムリアップで観光業にかかわるインターンシップを行うこと、首都プノンペンでのビジネス関連のインターンシップおよびビジネス研修を行うこと、さらにカンボジア現代史の負の象徴といえるポルポト政権時代の歴史についての学びを深めることを盛り込んだ1か月の研修である。

この研修の一環として、プノンペンにおけるビジネス立案のフィールドワークのために市内を探索していた学生が、両腕両足を失い、道端で本を売りながら生計を立てている人物と遭遇する。日本では想像したこともないような厳しい現実と向き合うこの人物に質問したことをきっかけに、カンボジアにおける地雷被害について知ったこの学生は、カンボジア滞在中に自ら地雷博物館など訪れて学びを深める。その中で出会った、地雷除去活動家のAki Ra氏の話に感銘を受けた彼は、本学に氏を招聘して講演してもらいたいという希望をもって帰国した。ジャングルの火事に際して「自分ができることをできる限り頑張りたい」とくちばしに一滴ずつ水を含んで消火に努めた伝説の鳥、クリキンディ



図8 学生が「ひとしづくプロジェクト」のために作成したポスター

にちなみ、彼はこのプロジェクトを「ひとしづくプロジェクト」と名付けた。

留学報告の場において彼の熱意に接し、なんとかこの講演会を実現させる一助になりたいと思いつつも、せっかく学生が主体的に考えた企画なのでなるべく学生自身の手で実現させたいと考えた。そこで、この学生を恵庭市の企画課に紹介し、このプロジェクトについてプレゼンテーションさせた上で、どのようなアプローチをしていくべきかアドバイスを求めた。恵庭市企画課からは恵庭市が学生団体の活動を支援するために設置した基金の紹介や、恵庭で活動する様々な団体への橋渡しなどの協力をいただき、現在なおこの計画の実現に向けてこの学生は奔走中である。

このプロジェクトも、GCCにおける留学報告会から始まって大きく育っていったプロジェクトである。GCCにおける英会話の機会の提供、という小さな集まりから発展して、こうした学生主体の様々なプロジェクトが始まった

ことを非常にうれしく思い、今後も応援したいと思っている。

2.7 2016年の活動の総括としての学会発表

上記のような活動の広がりについて、本学で11月13日に開催された大学英語教育学会北海道支部第3回研究会の中で発表する機会が与えられ、それぞれのプロジェクトの代表者が英語でプレゼンテーションを行った。この発表は参加した他大学の英語教員に非常に肯定的に受け止められ、本学科の課外の取り組みが高く評価された。発表した学生たちにとっても、学会の支部研究会という小さな集まりではあったが学会活動の一部としての発表を経験できたことは非常に有意義だったと考える。

3. Global Community Centre (GCC) における活動の教育的意義と今後の展望

本小論に概括したように、GCC開設二年目にあたる2016年度においては開設当初に想定された利用の在り方を大きく超えて、実に様々な活動が展開され、学生たちは熱心にGCCを活用し英語の運用能力を高めようと積極的に英語で話す習慣を身に付けてきた。GCCにおけるこうした英語のコミュニケーションの常態化はGCCの領域から外にも伝播し、ネイティブ・スピーカーの教員に対してのみならず日本人教員に対しても、また、日本人の学生同士でも英語によるやり取りが日常的にみられるようになった。実際、筆者らが所属する学会運営の手伝いに本学科の学生を動員した際も、業務連絡を含むすべてのやり取りを英語で行っていることについて、他学の教員から驚かれることがよくあった。ゼミ生をはじめとする上級生たちが日常的に英語で会話するのを目にする新入生にもこうした空気は広がり、教室外でも当たり前のように学生たちが英語でコミュニケーションする場面が増えていることはGCCを開設した大きな成果といえるだろう。

しかしGCCでの活動が英語の使用場面を増やしたこと以上に特筆すべきは、学科教員・国際課・および留学斡旋企業の連携によるGlobal Caféを除いてすべての活動が学生たちの発案によるもの

であったことだろう。学生たちはこの1年間、GCCでの仲間づくりを加速させ、互いに刺激しあい、励ましあいながら様々なプロジェクトを生み出してきた。その取り組みはすべて、「英語を学ぶ自分がほかの人のためにできることは何か」という奉仕の精神に立脚している。彼らは純粋に、自らの英語の運用能力が高まったことを周りの人に還元したいと願い、その方法を模索していった。単位や報酬といった見返りを求めないこうした活動を、互いに助け合いながら展開する彼らは、英語の運用能力以上に大きなものを学んでいる。

同時に、こうしたプロジェクトを実現させるために、彼らは学科の教員のみならず国際課や恵庭市役所などの学内外の支援を自ら求めに行くという行動を起こしていった。そこには教員からの支援もちろんあったが、特に恵庭市役所や恵庭にある様々な団体へ相談し、アドバイスをいただきながら一つの計画を形作っていくというプロセスそのものが、これらの学生にとっては大きな社会勉強の場となったと思う。来年度以降、さらにGCCがクリエイティブな活動を生み出す場として、新生国際言語学科のシンボルとして発展していくことを期待し、学生の活動を支援していきたいと思う。

The Widening Activities of the Global Community Centre (GCC) and the Pedagogical Outcomes

SANO Aiko, MITSUGI Makoto and RICHMOND Sarah

Abstract: Responding to the urgent call to reform the curriculum at the Department of International Language Studies at Hokkaido Bunkyo University, a new set of curricula was implemented in April 2016. In order to supplement and strengthen the changes made in the curriculum, two projects were introduced: one to encourage students to study abroad, and the other, to create a space for students to interact on a daily basis using foreign languages. In relation to the second project, the present paper reports the outcome of a series of projects implemented by the Bunkyo University students utilising the Global Community Centre, a space where students must communicate in a language other than Japanese. All of the activities not only created opportunities for students to communicate in English on a daily basis but also to serve the local community and their peers. This also fostered an independence when it came to students creating their own research and connections in the community.

Keywords: communication, English proficiency, project